誌上行学講習会

高佐日煌上人

②の餓鬼界　これもやはり別社会を構成しているようです。即ち乞食浮浪人の社会であります。バタやというのがありますが、これは乞食とは違い一種の下層民と考えるべきでしょう。そうではなくて全く働かないで人の情にすがって物を食っている類、それも職業的なものを指します。わざときたないものを着て、変装する。病気でもないのに病気のように見せかけたり、よその子供を借りて来て泣かして金をいただいたりする。一日いくらで子を貸すという立場の乞食、とにかく不思議なことを平気でやっているのであります。

私はかつて日蓮宗々務院に奉職していました時社会事業を行い、一日二銭という無料に近い宿泊所をつくったことがあるのですが、そこへ泊りに来る人間の層というと、あまり人間並でない人ばかり、犯罪常習者といった風なものばかりでありました。ケンカはする、バクチは打つ、女房の取りかえっこさへする。何とかして更生させてやらうと思いずい分注意したのですが、一向に馬の耳に念仏でありました。

そんなある時、乞食の一人が死んだのですが、この乞食、死ぬ時に遺言をして「私の葬式は親分にやってもらって下さい」といって死んで行きました。親分の名と住所を聞いてたずねて行くと、花川戸に一軒家をかまへて、タンゼンなどを着こなしてなかなかゆうぜんとした男でした。理由を告げて葬式をやってもらいたいと言うと、「わかりました」と一言、すぐさま手はずをととのえて普通並みの葬儀をやりました。

色々聞いてみると此の親分は浅草六区一帯をなわばりにしていて、自からイザリにもなるというのであります。体にはボロをまとい、スネにゾウキンをあてがい、ゲタを手にはき、犬のようになって歩く、首にかめの子ダワシを四つばかりぶら下げて首輪のアクセサリーになると

いう、とにかく大変な乞食であります。

③の畜生界は淫売陰間のことでありまして、いわゆる倫理のない世界のことであります。自分の貞操を販売して生きている。これも別社会を構成しているといえます。この程売春禁止法が成立いたしまして、表向きのインバイは出来なくなりました。しかし赤線は消えてなくなったとはいえ実際には決して無くなってはいません。闇の女は現存し、性病の蔓延もめだってはいるのであります。我々はこれを軽く見すごしてはならな

④の修羅界、これは不良、暴力団の社会であります。今や警視庁がやっきとなって絶滅をはかっております。しかしこの組織たるや極めて固くバクチ打ち、テキヤ、右翼団体、仮設興業師（みせもの・サーカス等）は後を絶つことがないようであります。又よく浅草等で大声をあげて薬を売っているのがあります。「これは肺病の特効薬である。さあ早くかってためしなさい。」

しかし実はこの薬たるやソバヤのつゆのダシを粉にしたものであったり、とんでもないまやかしものであります。かって帰えるとすぐだめになるような万年筆を「パーカーである」等と偽って売りつけるものもあります。これらは確かに修羅界の人間と言うべきでありましょう。

⑤の人間界　ここで注意してみたいことは人間と人との違いであります。「人間」の上の一字を「人」といい動物との違いを示す。即ち人格を意味します。したがって「人間」というのは人と人との間、人格と人格のふれ合い、即ち社会人間（格）社会人を「人間」というのであります。よく「お前はそれでも人間か」という言葉を聞きますが、これは社会人としての正しい人格をもっているのかという意味でありましょう。

此の場合の人間界というのは庶民大衆であります。一般の良民の層を指し、社会に害を与えない人に迷惑をかけないという、一人前の立場であります。